



アイヌ語で「広場」の意味
文 北原 次郎太 絵 小笠原 小夜



道内には、アイヌ語が基になった地名がたくさんあるよ。
いくつ読めるかな。
①空知管内月形町札比内
②十勝管内陸別町斗満川
③北斗市の茂辺地川

＝答えは紙面の下に

読んでみよう

アイヌ語には日本語にない音があります。これをカタカナで書くときは、字を小さくして表します。このページのタイトル「ミンタラ」の「ラ」もそうですね。小文字は全部で14種あります。7月の「ミンタラ」から毎回、その読み方を順番にしょうかいしています。

今回は「ツ」(小さいツ)です。
例えば「ベツ」(川)、「クツ」(帯)、「タツ」(樺)という単語などに使われます。発音するときは、ゆっくり「ベツト」というつもりで、舌先が前歯の付け根についた所で止めます。同じ子音が続く場合も「ツ」で書き表します。子音は、日本語では「あ、い、う、え、お」以外の音です。くわしく説明すると、「カッコク」(かっこう)や「イトツパ」(刻み印)の「ツ」は、それぞれ「k」「p」の音ですが、次の文字にも同じ子音が続くので、「ツ」を使うのです。少しむずかしかったかな。

「ツ」の発音を動画でも学べます。出演は関根摩耶さん。指導は千葉大学文学部教授の中川裕先生です。スマートフォンを持っている人は、QRコードから読みこんでください。



クイズの答え

① 札幌市(札幌)の「サ」はアイヌ語の「サ」の音で、アイヌ語の「サ」は「山」の意味です。
② 斗満川(トマンガハ)の「トマン」はアイヌ語の「トマン」の音で、アイヌ語の「トマン」は「川」の意味です。
③ 茂辺地川(モヘノエガハ)の「モヘノエ」はアイヌ語の「モヘノエ」の音で、アイヌ語の「モヘノエ」は「川」の意味です。

失人たちの物語 シンリョオロッパ

監修 佐々木 利和

戦いの中、和人救助し部下を指揮

チキリアシカイは18世紀に北海道東部のアッケン(厚岸)に暮らした女性です。ほかに「ヨツケン」という名前もありました(※)。1789年に65歳くらいだったといいますが、1720年ごろに生まれたことになりません。

息子のイコトイは、厚岸からウルップ島にかけて勢力を持っていた有力なリーダーでした。また夫が死んだ後は、クナシリのリーダー・ツキノエを夫とし、彼女自身も高いリーダーシップを持つ人として知られていました。

チキリアシカイの絵姿が残っています。松前藩の家老がかいた「夷酋列像」という絵です(酋は「野蛮人の長」という意味の古い言葉で、今では使われません)。1789年に起こった「クナシリ・メナシの戦い」をおさめることに努力したアイヌのリーダー12人をえがいたものです。

戦いが起きるにはそれだけの理由がありました。チキリアシカイたちは、それがもっと大きな悲劇を生むと知っていました。クナシリ島にいたチキリアシカイは大混乱の中で和人を救助し、戦いが広がらないように部下を指揮しました。

戦いの後、主立った37人は松前藩によって処刑され、チキリアシカイたちは戦いが起きた事情を説明するために松前城まで行きました。チキリアシカイはだれよりも堂々と話をしています。

「夷酋列像」はこの時にえがかれたのです。

この絵のチキリアシカイの表情にはいろいろな見方があります。「若者たちを殺されたが、表向きはしたがわねばならない、そのうらみのこもった目」という見方。また、12人のリーダー全員とも、いかにも悪いことをしような「悪人キャラ」にえがかれたという見方もできます。

みなさんは、チキリアシカイが何を思っていたと考えますか？

※アイヌ文化では本名を大切にしています。あまり使わず、ふだんは別の名前を呼び合っています。チキリアシカイが二つ名前を持っているのも同じ理由かもしれません。



「烈女」と呼ばれたチキリアシカイ (18世紀)

後ろは「夷酋列像」にえがかれたチキリアシカイの絵

チキリアシカイたちは、アッケンからエトロフ島、クナシリ島を自らの区域(テリトリー)として狩猟をし、もっと北の島々に暮らす北千島アイヌとウルップ島で交易をしていました。

1786年ごろにはロシア人も毎年来て、美しい絹や木綿、砂糖、薬をもたらしました。チキリアシカイもロシア製の見事な織物を持っていたといえます。

アッケン付近にやって来る和人は、松前藩のさむらいや商人、出かせぎの人、江戸幕府の役人などでした。松前藩は幕府からアイヌとの交易の許可をもらい、商人に交易をさせます。

松前藩のさむらいたちは、商人が悪いことをしないように、また外国人が近づかないように見張るのが役目でした。しかし実際にはひどい商人たちを放置し、本当は持ちこみが許されないロシア製品を売り買っていました。これは幕府には絶対に秘密でした。

クナシリ・メナシの戦いは、和人商人のひどいやり方におこったアイヌたちが起こしたものでした。クナシリ・メナシ地方に来ていた商人はアイヌの男女を労働者として使い、給料も他の地域に比べて7分の1ほどしかはらいませんでした。人々をおどし、暴力をふるうことも多く、たまりかねた男性たちが立ち上がったのです。

今から220年前のことですが、この戦いで命を落とした人々を供養するお祭りが、今でも根室市のノッカマップみさきで行われています。

ロシア人とも毎年交易